

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

助産師学生が認識する母性看護学実習と助産学実習  
の違い

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 時穂 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/607">https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/607</a>

# 助産師学生が認識する母性看護学実習と助産学実習の違い

田中 時穂

日本赤十字九州国際看護大学

key word : 助産師学生, 助産学実習, 母性看護学実習, 学生の認識

## I. はじめに

助産学実習は助産師学生(以下、学生)が講義や演習で学んだ知識・技術・態度を臨床での助産実践を通して学びを統合する助産師教育において重要な課程である。学生は実習目標の達成に向けて妊産褥婦と胎児・新生児を中心に情報収集からアセスメント、計画立案、実施、評価の一連の助産過程を展開しながら実習を進める。助産学実習では保健師助産師看護師学校養成所指定規則にて定められてる通り、学生は助産師や医師の指導の下で10例程度の分娩介助を実施する。分娩介助のほかにも、学生は助産学実習で妊婦への保健指導や母親学級、褥婦への授乳指導や沐浴指導、退院指導、退院後には電話訪問や家庭訪問などを行う。その過程で学生は、臨床指導助産師(以下、指導者)に報告・相談を行い、助言を受けながら実習を進めていく。このように実習の多くの場面で助産実践が求められることは、学生がこれまで経験してきた看護学実習にはない助産学実習の特徴である。また、実習時間の多くを占める分娩介助では分娩が自然な営みであるが故に、いつどのような産婦がどのような状態で入院し分娩に至るのかを予測することは難しいため、実習時間の延長や休日、夜間に実習を行うなど、実習時間が流動的な場合がある。さらに、母子の2つの生命に関わること、産婦や胎児の状況が刻々と変化する中での助産実践であり、学生は知識・技術の習得を求められ、緊張やストレスは高いと思われる。

助産学実習に関する先行研究では、分娩介助技術の習得には段階があること<sup>1)2)</sup>や、分娩介助実習の技術・助産診断の到達度に関すること<sup>3)4)5)</sup>、学生の学びに関すること<sup>6)7)8)</sup>が明らかになっている。

また、産婦の分娩状況により実習時間が延長すること<sup>9)10)</sup>や、分娩介助例数確保のための夜間実習により、学生は心身の疲労や緊張の中で精神的負担を強いられていること<sup>9)10)</sup>など、助産学実習の現状や学びが明らかにされている。

助産学実習には前述した特徴があるが、学生が助産学実習と看護学実習、特に母性看護学実習との違いは各学校の実習要項以外に明らかになっているものではなく、学生がどのような違いを認識しているのかは明らかにされていない。

学生が認識する母性看護学実習と助産学実習の違いを明らかにすることは、助産学実習のオリエンテーション時、助産学実習の特徴を説明することに役立ち、学生が助産学実習に臨む心の準備をすることができることにつながると考える。また、指導者にとっても学生思いや戸惑いを理解するための情報源となり、実習指導に活かすことができると考える。

## II. 目的

本研究の目的は、母性看護学実習と助産学実習を経験した助産師学生が認識する両実習の違いを明らかにすることである。

## III. 方法

(1)研究対象：A助産師学校に在籍し、カリキュラムにある助産学実習がすべて終了した助産師学生16名。

(2)調査期間：平成25年12月

(3)用語の定義：

「臨床指導助産師(指導者)」…助産師学生を臨床で指導する臨床助産師で、学生指導責任者だけでは

なく、学生指導に関わるすべての助産師をいう。

(4)データ収集方法：無記名の自記式質問紙を用いてデータを収集した。学生が所属する助産師学校の教員に、研究者が研究の趣旨や方法について説明し、学生への説明を依頼した。研究者が学生の人數分の研究の趣旨と依頼について書いた書面・質問紙・厳封できる封筒の3点を準備し、教員に郵送した。教員は学生に研究の趣旨を説明した後、研究協力への強制力がかからないよう、教室を退室した。クラス委員の学生が無記名自記式質問紙を全員に配布した。質問紙への回答は助産師学校の教室で行われ、研究の趣旨に同意できる学生のみが記入・提出することとし、記入後、すぐに質問紙を封筒に入れ厳封し、教室の回収箱に入れてもらうこととした。クラス委員の学生が回収箱に集まった封筒のすべてを開封することなく、まとめて研究者に郵送した。

(5)質問紙の内容は①学生の属性、②母性看護学実習と助産学実習の違いはどのようなことと思うか、の2項目とした。

(6)分析方法：回収した質問紙を繰り返し読み、記述内容が意味することを抜き出した。それぞれの学生の記述が意味することをコード化した。コードについて類似性・相違性に従って分類し、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化した。分析に際し助産学の研究者からスーパーバイズを受け妥当性の確保に努めた。尚、助産師学校に入学する学生は多様な経歴を持っているが、助産師学校入学までの経緯や職歴の有無の差異を明らかにすることが本研究の目的でないため、学生の背景を考慮することなく分析した。

#### IV. 倫理的配慮

対象者には書面で研究の趣旨を説明した。さらに、研究への協力は自由であり、協力の有無や記述内容が学校での評価に影響しないこと、質問内容に対し回答したくない場合は記入しなくてよいこと、質問紙は研究者のみが閲覧することを説明

した。質問紙は無記名とし、厳封できる封筒を質問紙と一緒に配布し、質問紙を封筒に入れ厳封した状態で回収した。また質問紙への記述と提出を以て研究の同意が得られたと判断することを説明した。研究結果については、学術集会での発表ならびに論文投稿することについても説明した。本研究は日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:13-10)。

#### V. 結果

16名の学生に研究を依頼し、全員の質問紙を回収することができた。そのうち1名の未記入回答を除き、全ての項目に記入のあった15名を有効回答とした(有効回答率92.5%)。回収した質問紙を分析した結果、質問項目に対し、カテゴリー、サブカテゴリー、コードが抽出された。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、記述された学生の意見を「 」、記述された学生の意見を意味を補足する言葉を( )で示す。

##### (1)対象者の属性

対象者は全員が20代女性であった。高校卒業後に3年課程の看護専門学校へ進学し、卒業後に看護師経験をすることなく助産師学校へ入学した学生が最も多く9名であった。次いで、看護系大学を卒業後に進学した学生が2名、看護系短期大学卒業後に進学した学生が1名、看護系以外の4年生大学を卒業後に看護専門学校を卒業した学生が1名、看護師として2~3年の臨床を経験した後に進学した学生が2名であった。

##### (2)学生が認識する母性看護学実習と助産学実習の違い

分析の結果、4つのカテゴリー、と10のサブカテゴリー、17のコードが抽出された。詳細を表1に示す(表1)。

【助産学実習は対象者との関わりが多い】は〈助産学実習は看護学実習に比べ対象者への実践が多い〉〈助産学実習は看護学実習に比べ1人の対象者との関わりが深い〉の2つのサブカテゴリーで構

表1 学生が認識する母性看護学実習と助産学実習の違い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
助産学実習は対象者との関わりが多い	助産学実習は看護学実習に比べ対象者への実践が多い	助産学実習では分娩介助がある 助産学実習は母性看護学実習より学生が対象者へ直接ケアを実施することが多い 助産学実習は乳房ケアの実践がある
	助産学実習は看護学実習に比べ1人の対象者との関わりが深い	1人の対象者との関わりが深い
助産学実習は学生に求められる能力が高い	学生なりの助産診断とそれに伴う実践が求められる	学生なりの助産診断とそれに伴う実践が求められる
	学生は主体的な行動が求められる	学生自らが学習し行動していくことが求められる 主体的な指導者との関わりが求められる
	分娩介助技術の習得が必要	助産学実習では分娩介助がある
	学生に求められるレベルが高い	学生に求められるレベルが高い 助産師学生は「わかるもの」と指導者に思われている
助産学実習は学生としての責任を感じる	助産学実習は看護学実習に比べ対象者への実践が多い	助産学実習では分娩介助がある 助産学実習は母性看護学実習より学生が対象者へ直接ケアを実施することが多い 助産学実習は乳房ケアの実践がある
	分娩介助は責任が大きい	分娩介助は学生であっても責任が大きい 正常な分娩経過であっても異常に傾くことがある
		夜間・休日も実習（分娩待機）がある
助産学実習の実習体制	休みが少なく体力的に厳しい	分娩介助では対象者の状況に左右されるため実習時間が長い 分娩介助は緊張が強く体力の消耗が激しい
	タイムリーな実践評価	分娩介助1例1例が評価される 記録の提出期限がある
	指導者との関わりが多い	指導者との関わりが多い

成された。学生は「(母性看護学実習と助産学実習は)全く違う、助産学実習は実践する場面が多い」「妊娠期、分娩期に学生が妊婦・産婦に直接関わるかどうかの違い」「乳房ケアの実践があること」「助産学実習では分娩介助があること」「母性看護学実習は見学が多いが助産学実習はほとんどが実践である」と述べていた。

【助産学実習は学生に求められる能力が高い】は〈学生なりの助産診断とそれに伴う実践が求められる〉〈学生は主体的な行動が求められる〉〈分娩介助技術の習得が必要〉〈学生に求められるレベルが高い〉の4つのカテゴリーで構成された。学生は「助産学実習では自分で判断して、どう動くかを考えて実際にケアをする」「指導者との連絡・調整を含めて学生が主体的に動くことが求められる」「看護学実習は指導者や教員が導いてくれるが助産学実習では学生自身が主体となって考え、学習、行動していく点」「助産学生は『分かるもの』

と指導者から思われている」「学生ができること、任せてもらえることが多くなる半面、求められるレベルも高くなる」と述べていた。

【助産学実習は学生としての責任が大きい】は〈助産学実習は看護学実習に比べ対象者への実践が多い〉〈分娩介助は責任が大きい〉の2つのサブカテゴリーで構成された。学生は「助産学実習では分娩介助に実際につかせていただくので、責任をもって臨む姿勢が特に重要だと思う」、「実際にケアをすることが多いので、学生であっても責任を感じる」と述べていた。

【助産学実習の実習体制】は〈休みが少なく体力的に厳しい〉〈タイムリーな実習評価〉〈指導者との関わりが多い〉の3つのサブカテゴリーで構成された。学生は「分娩介助は緊張や体力の消耗が激しい」「助産学実習は夜間や休日も関係なく実習がある」「24時間休みがなく過酷だった」「実習時間が長い」「分娩介助の1例1例に点数がつく」

「助産学実習では記録の提出に時間制限があること」「助産学実習は教員よりも指導者との連携が多くなる」と述べていた。

## VI. 考察

学生は同じ周産期領域を中心として展開される母性看護学実習と助産学実習の違いを感じており、本研究にて【助産学実習は対象者との関わりが多い】【助産学実習は学生に求められる能力が高い】【助産学実習は学生としての責任を感じる】【助産学実習の実習体制】の4つのカテゴリーが明らかとなった。

助産学実習は、10例程度の分娩介助を行うとの他、助産師の指導の下に妊産褥婦へのケアの実践が多いという特徴がある。平成23年、厚生労働省が発表した「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」<sup>11)</sup>の中で、看護学実習において患者層の変化や患者の権利擁護のために実習を効果的に行うこと、目的にあった学習体験の機会の確保が難しくなっていることが報告されている。助産師を目指して養成機関に進学する者の中には、分娩介助を見学したことのない学生がおり、学生の母性看護学実習での経験は決して多くないと思われる。助産学実習では母性看護学実習で学生が経験する機会の少ない妊娠期・産褥期の保健指導や分娩介助などを、見学ではなく、指導者や教員の見守りのもとに学生が実施する。学生は「母性看護学実習では見学が多いが、助産学実習ではほとんどが実践である」と述べており、助産学実習では学生による実践が多いことを認識していた。さらに学生は実習期間を通じて繰り返しケアを実践するため、助産学実習で対象者との関わりが多いと感じたと考える。

助産学実習において、分娩介助や保健指導などで対象者との関わりが多いということは、それだけ学生に求められる能力は高くなる。日本の助産師教育は、看護教育に積み重ねる形で行われており、助産学実習では母性看護学実習に比べ、学習

内容は専門的となる。そのため、学生に求められる知識や技術も高度になる。学生は「学生ができること、任せてもらえることが多くなる半面、求められるレベルも高くなる」と述べており、学生は実習での経験を通して、学生に求められる能力の高さを実感していた。分娩介助では母子の2つの命と付き添う家族に目を向け、時間の経過とともに身体・精神状況が変化する対象者の助産診断を行い、寄り添いながらケアを行うこと、安全な分娩のための分娩介助技術が必要となる。実習で学生に求められる助産診断や計画は、対象者の経過と個別性に配慮したものであることや、学生は分娩介助技術の習得が求められるなど、学習課題は多く、学校で学んだ知識や技術を駆使して実践することは容易ではない。鳥越は分娩期の助産診断では短時間で効果的に診断過程をふまなければならない難しさ<sup>12)</sup>について述べており、それに合わせて母子が安全に分娩を終了できるように介助する技も習得していかなければならない分娩期の実習は、助産学実習の中でも特に学生に求められるレベルは高いと考える。

さらに分娩は正常に経過していたとしても、いつ異常に傾くかは分かりにくい。学生は母子の2つの命を前に、母子の安全を守るという責任を感じながら実習をしていることが明らかになった。また、助産学実習では対象者へのケアの実践が多い。実習では助産師の指導・責任のもとに学生は実践するが、分娩介助に限らず学生は対象者に直接ケアを行うことの責任を感じていた。

分娩は自然現象であり学生の実習時間に合わせて分娩が開始し終了する可能性は極めて低い。助産学実習は分娩介助や継続事例の妊婦健診など、夜間、休日に実習を行う学校は少なくない。特に分娩介助では、対象者の経過によっては、実習時間が延長することや夜間や休日に実習を行う場合がある。先行研究では夜間実習を経験する学生が少なくないことや学生の実習時間が予定の1.6倍の時間であったこと<sup>9)</sup>などが明らかになっている。

本研究で学生は「助産学実習は夜間や休日も関係なく実習がある」「24 時間休みなく過酷だった」「分娩介助は緊張が強く体力の消耗が激しい」と述べており、夜間・休日実習に対する実習時間の調整は学校で行われていると思われるが、助産学実習は学生にとって過酷であることが明らかとなった。また、分娩介助 1 例 1 例に対し指導者と振り返りを行い、実習記録を書き次への課題を明らかにする。そのため実習終了時の総合評価だけでなく、学生はタイムリーな評価を受けながら実習を行う。タイムリーな学生へのフィードバックは学生自身の成長や学習課題を明確にするためには重要であるが、学生は常に評価を受け、自分自身と向き合いながら実習を行っていることが明らかとなった。さらに学生は「助産学実習では教員よりも指導者との連携が多くなる」と述べており、助産学実習の様々な場面で学生は指導者に報告・相談を行い、助言を受けながら実習を進めていくことを認識していた。これらの助産学実習の実習体制は、学生がそれまでに経験してきた看護学実習にはない助産学実習の特徴であると考えられる。

助産学実習は助産診断・技術学、地域母子保健及び助産管理の実習を含むとされ、10 例程度の分娩介助の実施など留意点が明らかとなっている<sup>13)</sup>。母性看護学は妊産褥婦および新生児への看護活動に加え、次世代の健全育成をめざし、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした看護活動である<sup>14)</sup>。このような視点から各学校で実習の定義や目標が定められていると思われる。村上は母性看護学と助産学の境界は、業務独占である助産行為と助産管理以外は重なり合っていることを述べており<sup>15)</sup>母性看護学実習と助産学実習の違いについては明らかにされていない。しかし、助産学実習には母性看護学実習を含む看護学実習にはない特徴があると考えられる。学生は 2 つの実習を経験することで、実習の場で学生が経験することを中心に母性看護学実習と助産学実習の違いを感じていることが明らかとなった。

学生は助産学実習初期の頃、看護学実習とは異なる助産学実習の体制や求められる学習課題から戸惑うことが予想される。そのため、実習のオリエンテーションは重要であり、同じ周産期領域での実習であっても、母性看護学実習と助産学実習の違いを説明することで、実習に臨む心の準備ができると考える。また、母性看護学実習と助産学実習の両方を受け入れている施設があり、その場合、各学校の実習要綱や教員との打ち合わせで実習目標・目的を指導者や病棟が把握しておく必要がある。本研究結果は限られた学生の経験に基づき認識した両実習の違いであり、母性看護学実習と助産学実習の違いの一部にすぎない。しかし、学生が認識する両実習の違いを知ることによって、学生の戸惑いを軽減させ効果的な実習指導を行うことにつながると考える。

## Ⅶ. 結論

学生は母性看護学実習と助産学実習の違いとして【助産学実習は対象者との関わりが多い】【助産学実習は学生に求められる能力が高い】【助産学実習は学生としての責任を感じる】【助産学実習の実習体制】の 4 つを認識していることが明らかになった。

## 文献

- 1) 堀内寛子・服部律子・谷口通英, 他: 本学学生の分娩介助技術習得のプロセスとどれに応じた臨床指導のありよう, 岐阜県立看護大学紀要, 7(2), p. 9-17, 2007.
- 2) 藤井宏子・亀石知美・尼子華子・滝川節子, 他: 助産学生の分娩介助技術習得に関する検討—本学助産学専攻科学生の自己評価から—, 県立広島大学保健福祉学部誌, 12(1), p. 117-127, 2012.
- 3) 唐沢泉: 助産師学生の自己評価における分娩介助 10 例終了後の到達度, 岐阜医療科学大学紀要, 2, p. 89-96, 2008.

- 4) 菊地圭子：助産学実習における助産診断・技術の到達度と自己評価能力，山形保健医療研究，11，p. 83-92，2008.
- 5) 丸山和美：助産学生の分娩介助実習後の到達度平成16年度後の改善点から検討する，山梨大学看護学会誌，5(2)，p. 31-38，2007.
- 6) 服部律子・堀内寛子・谷口通英，他：本学における助産実習での学びの内容，岐阜県立看護大学紀要，7(2)，p. 3-8，2007.
- 7) 松井弘美・永山くに子・島田啓子：学士課程で助産を選択する学生の分娩介助10例における学び - 分娩介助実習体験を中心に - ，富山大学看護学会誌，10(1)，p. 37-46，2011.
- 8) 宮澤美知留・清水嘉子・松原美和，他：助産実習における分娩介助時の学生の学びとその変化，長野県看護大学紀要，14，p. 13-23，2012.
- 9) 古田祐子・石村美由紀・佐藤香代：学士課程における助産実習の技術到達度目標基準 - 分娩介助技術・健康教育の実習到達評価記録からの分析 - ，福岡県立大学看護学研究紀要，4(2)，p. 54-63，2007.
- 10) 大野弘恵・村松十和：助産師学生の分娩介助実習の実態について - 本学の実習指導資料からの分析 - ，岐阜医療技術短期大学紀要，20，p. 41-50，2004.
- 11) 厚生労働省(2011年)，看護教育の内容と方法に関する検討会報告書，2014年9月25日閲覧，<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>.
- 12) 鳥越郁代・藤木久美子・古田祐子，他：助産師学生の分娩期助産過程の到達状況に関する一考察，福岡県立大学看護学研究紀要，9(2)，p. 53-61，2012.
- 13) 福井トシ子：助産師業務要覧(2)基礎編，日本看護協会出版会，p. 21，2012.
- 14) 森恵美：系統看護学講座 母性看護学各論 母性看護学2，東京，医学書院，p. 1，2013.
- 15) 村上明美：大学で看護と助産の両方を学ぶと  
いうこと，看護教育，54(11)，p. 994-997，2013.